



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活節第6主日B年(2021年5月9日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 19章 25－26、34－35、44－48節

第二朗読：使徒ヨハネの手紙一 4章 7－10節

福音朗読：ヨハネによる福音 15章 9－17節

テーマ：父の掟を守り……

三つの朗読から

第一朗読の「人を分け隔てなさないことが」(34節)は印象的です。ペトロはユダヤ人として自分と異邦人とを分け隔てる律法を生きてきました。しかし、コルネリウスとの出会いを通じて、律法という壁が神の視点からしたら無意味であることに気がついたのです。

第二朗読の「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して」(10節)。神さまからの愛は、いつも人間の愛よりも先にあります。神さまの愛は先行するのです。

福音朗読にある「友と呼ぶ」(15節)を心に留めたいです。わたしたち一人ひとりに親しく「友よ」と呼んでくださるイエスさまとの生涯をかけたお付き合い、それが信仰生活です。

説教

今日の福音朗読は先週の箇所の続きです。しかし、先週、「わたしはまことのぶどうの木」と美しいイメージでイエスさまは語ってくださったにもかかわらず、今日の朗読箇所では、イエスさまは何か特別なものをわたしたちに伝えようとなさっているのではないのでしょうか。イエスさまの抜き差しならないお気持ちを今日の福音全体から感じます。

『ヨハネによる福音書』13章からはイエスさまの別れの説教が始まります。イエスさまは最後の晩餐でお弟子さんたちの足を洗いました。そして、ユダの裏切りを予告し、実際にユダは漆黒の闇夜へと消えていったのです。差し迫ったご自分の死を前にして、お弟子さんたちにこれだけは

伝えたいというのが、13章からの別れの説教(告別説教)です。長いお説教の中で、ほぼ真ん中に位置するのが、「まことのぶどうの木のとえ」です。しかし、たとえの前半と後半では少し意味合いが異なっていきます。今日の朗読箇所は、お弟子さんたちへの別れの内容となっています。「互いに愛し合いなさい」(12節)がメッセージの中心となるでしょう。今日、ここでは10節の「わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる」に注目しましょう。

イエスさまは「わたしは父の命令を守ってきた」と言われます。ここでの動詞は現在完了形です。「今まで、ずーっと守ってきました」という意味です。イエスさまは、父の命令を守ることによって、すなわち、ご自分の生涯を通して父が求められるものを果たすことによって、父の愛にとどまり、父との交わりにとどまられたのです。そして今も父の愛の内にとどまって生きておられます。

同じように、弟子たちがイエスさまの命令を守るならば、弟子たちはイエスさまの愛の内にとどまることになり、復活されたイエスさまとのいのちの交わりに生きることになります。「わたしの愛にとどまっていることになる」では、動詞は未来形です。「とどまることになるでしょう」の意味です。弟子たちがイエスさまの愛の内にとどまることになるかどうかは、弟子がこれからイエスさまの命令を守るかどうかにかかっています。その命令とは、12節に明記されている命令、すなわち「互いに愛し合いなさい」です。

ご承知の通り、イエスさまの十字架でのお苦しみを目の当たりにして、お弟子さんたちは逃げてしまいました。しかし、復活なさったイエスさまと再会することで、イエスさまがどういった方であるのかが分かるようになっていきました。かつてイエスさまが話してくれたこと、なさったことの本当の意味を受け取れるようになっていったのです。「互いに愛し合いなさい」は生前のイエスさまの、それも死におもむく前の別れの言葉です。お弟子さんたちは、今やっとその言葉の意味が分かったのです。

大切なのは、お弟子さんたちと同じように、わたしたちがイエスさまにとどまっていることです。つながっていることです。現実の生活で、隣人と互いに愛し合って生きていくのはとても難しいです。認め合い、受け入れ合い、ゆるし合い、分かち合うことで「互いに愛し合いなさい」という掟は実現していきます。こうして、自分も相手も、どちらもイエスさまの愛に結ばれていくのです。